

## 県内唯一の「キワニスクラブ」

# 子ども支援の輪、大垣から

探訪  
ぎふトリビア

100年以上の歴史があり、世界三大奉仕団体の一つに数えられる「キワニスクラブ」。日本ではまだなじみが薄い「まず子どもを第一に考えよう」をモットーに、関連団体を含めると世界85カ国で50万人以上が子どもたちへの奉仕活動に汗を流している。県内にも唯一、2015年に設立された「大垣キワニスクラブ」があり、志を同じくする会員たちが地域の子どものために支援の輪を広げている。

(宮本寛)

キワニスクラブは1915年、米国で産声を上げた。キワニスとは先住民の言葉に由来し「みんな一緒に集まる」の意。関連団体であるジュニアクラブの出身者には、歌手の故エルビス・プレスリーさんや俳優トム・クルーズさんの名前もある。

東京五輪が開かれた64年には、アジア太平洋地域で初となる東京キワニスクラブが設立され、今年60周年を迎える。現在、全国41クラブでおよそ2千人が活動する。

大垣キワニス発足の種をまいたのは、セイノーグループ代表だった故・田口義嘉壽さんだ。スポンサークラブである名古屋キワニスクラブの会長から「岐阜にもキワニスを」と請われ、設立に動いた。大垣共立銀行元会長の故・土屋嶮さんを発起人代表に、趣旨に賛同した37人で立ち上げた。

「他に幾つも奉仕団体があるのに、また増やすのか、なんて言われた」。発起人の1人で、初代会長を務めた大垣西濃信用金庫相談役の西脇史雄さん(77)は笑って振り返る。キワニスの精神は子どもの支援にあることから「他とは違う意義がある」と理解を求め、

## 手作り「キワニスドール」を寄贈



会員たちが手作りする「キワニスドール」

◆ ◆ ◆

キワニスの大きな特徴の一つが「キワニスドール」の製作だ。キワニスドールは高さ40センチ、重さ500グラムの真鍮製の人形。目も鼻も口もない風変わりな人形は、病院で医師が若い患者に治療の方針を説明したり、時には人形に注射をしてみせたりして、不安や緊張を和らげる「プレパレーション」に使う。家族の顔を思いやり、抱きしめて寝たりすることで安心感を得る子もいるという。

この人形、実は全て会員が綿を詰めたり縫ったりして手作りしている。子どもの手に渡ることから、金属探知機を使って異物混入がないよう厳重にチェック。そうして毎年100体以上を作り、玩具や

会員数は西濃地域を中心に現在50人にまで広がった。



大垣キワニスクラブの歩みを振り返る(左から)現会長の佐竹輝美さん、初代会長の西脇史雄さん、事務局長の杉本行正さん、元会長の堤祐子さん＝大垣市内

## 来年10周年、幅広い世代が活動

大垣キワニスの特筆すべき点は、他団体より若い世代が多いことだ。これは設立に動いた田口さんの発案で「これからの財界を担う若い人や女性に入ってもらおう」という独自の組織づくりを進めたことによる。会員が後に自社のトップに就くことも多く、西脇さんは「大垣キワニスは出世クラブと言われる」と笑う。会員同士の交流も活発で、月例会では講師を招き、和やかな雰囲気の中で勉強にいそむ。西脇さんは「会員同士が親睦を深め、奉仕活動を通して自ら成長し、心を豊かにすることができると意義を語る。女性の活躍も顕著で、現9代会長の佐竹輝美さん(デリカサイト)や5代会長の堤祐子さん(日本耐酸塩工業)ら多くの女性が活動を引っ張り、クラブ内の女性サークル「クリオネ」も運営に大きく貢献。堤さんは「子どもたちの幸せのために自分にもやれることがあるんだと実感できて、会社の仕事においても勉強になった」と振り返る。

新型コロナウイルス禍で制約を受けた活動も復活しつつある中、大垣キワニスクラブは来年、発足10周年を迎える。現会長の佐竹さんは「これからも会員の皆さんと一緒に子どもに寄り添った支援活動を進化させ、支援の輪をさらに広げていきたい」と力を込める。